報告 REPORT

令和７年度
北海道医師会賞・北海道知事賞 受賞者業績紹介

本誌９月（第1284）号にてご報告いたしましたとおり、10月４日（土）午後３時より、札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会賞・北海道知事賞贈呈式が挙行されます。

ここに受賞された方々のご業績を紹介いたしますとともに、受賞者各位の一層のご活躍を祈念いたします。

－学術部－

令和７年度　北海道医師会賞・北海道知事賞受賞者

医師会名	職　氏　名	研究（業績）題名
札　幌　市	JA北海道厚生連札幌厚生病院 院長　髭（ひげ）　修平（しゅうへい）	ウイルス性肝炎の診断・治療における臨床的研究
北海道大学	北海道大学総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点 拠点長・教授　澤（さわ）　洋文（ひろふみ）	人獣共通感染症の克服に向けた研究
	北海道大学大学院医学研究院 小児科学教室 教授　真部（まなべ）　淳（あつし）	北海道における小児がんの研究・診療体制の確立
札幌医科大学	札幌医科大学医学部附属研究所 再生医学研究所神経再生医療学部門 教授　本望（ほんもう）　修（おさむ）	脊髄損傷患者に対する新しい再生医療の開発と実用化
	札幌医科大学医学部医学科 医療安全・病院管理学講座 教授　橋本（はしもと）　暁佳（あきよし）	画像診断を用いた循環器疾患の心事故予測に関する研究と医療安全推進のための活動
旭川医科大学	旭川医科大学地域共生医育センター センター長・教授　牧野（まきの）　雄一（ゆういち）	低酸素応答性転写因子群による生体機能調節機構の解明

北海道医師会賞・北海道知事賞

ウイルス性肝炎の診断・治療における臨床的研究

JA北海道厚生連札幌厚生病院

院長　髭（ひげ）　修平（しゅうへい）

髭修平先生は、昭和58年３月に北海道大学医学部を卒業後、同大第三内科に入局。その後、釧路労災病院、市立札幌病院勤務を経て、平成13年より北海道大学医学部附属病院講師、平成22年より北海道大学病院肝疾患相談センター長を歴任。平成24年４月より札幌厚生病院第三消化器内科（現在は肝胆膵内科）に勤務し、令和２年４月より院長に就任している。

髭先生はわが国の肝臓病の最大の原因であるＢ型およびＣ型ウイルス性肝炎に関する臨床的課題に対して遺伝子解析を含めた臨床研究を一貫して継続してきた。Ｃ型肝炎ウイルス（HCV）発見黎明期の1990年代初頭には血清および肝組織中のHCV定量測定系を開発し、病態や治療反応性との関連を明らかにした。インターフェロンとの併用で有効性が向上する薬剤であるribavirinについては抗HCV効果の作用機序や宿主間の差異を明らかにしてきた。Ｂ型肝炎ウイルスについては、核酸アナログ製剤治療に起因する複数の薬剤耐性ウイルスを高い感度・特異度で定量測定を可能にする新規の単塩基変異株測定系を開発し、肝炎再燃のウイルス学的背景の解析を可能にした。ribavirin、telaprevir、adefovirなどの抗ウイルス治療薬の血中濃度と臨床効果との関連性の検討、わが国で新規に開発された血清肝線維化マーカーの初期解析なども行い、実臨床に還元可能な結果を示してきた。在籍施設に通う多数の肝炎患者をもとに多くの治験や多施設研究にも参加し、日本医療研究開発機構の班研究には現在も参画して北海道の肝炎治療の発展に尽力した。

人獣共通感染症の克服に向けた研究

北海道大学総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点

拠点長・教授　澤（さわ）　洋文（ひろふみ）

澤洋文教授は、北海道大学医学部を1986年に卒業後、2005年より北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター、2022年10月からは、ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業により設置された、北海道大学ワクチン研究開発拠点の拠点長として、人獣共通感染症に対するワクチンの研究開発を主導している。2023年４月には、北海道大学　ディスティングイッシュトプロフェッサーの称号を授与された。

澤教授は、これまでに400報以上の国際学術論文を報告すると共に、塩野義製薬株式会社と長年の共同研究を実施しており、特にCOVID-19に対する抗ウイルス薬の開発を塩野義製薬株式会社と実施し、2022年11月に緊急承認制度に基づいて、厚生労働省より製造販売承認となった3CLプロテアーゼ阻害薬であるエンシトレルビル　フマル酸（ゾコーバ）の開発に貢献した。

さらに、高度封じ込め実験施設（BSL3）において、自らウイルス感染実験を実施し、東京大学医科学研究所、国立感染症研究所、北海道大学医学研究院等との共同研究を通じてSARS-CoV-2の増殖機構を解明した。

また、アフリカ、南米等を対象とし、20年にわたりフィールド調査を実施しており、ザンビア共和国には58回渡航し、動物から多くの病原体を検出・単離し、単離したウイルスを用いた病原性解析から、診断法・治療法・ワクチン開発へと発展させる一連の研究を展開している。

北海道における小児がんの研究・診療体制の確立

北海道大学大学院医学研究院小児科学教室

教授 真部（まなべ） 淳（あつし）

真部淳教授は、1985年に北海道大学医学部を卒業後、聖路加国際病院で卒後研修を受け、1989年からローマ・カトリック大学、セントジュード小児研究病院（米国メンフィス）にて小児がんの基礎と臨床を学び、1997年からは東京大学医科学研究所で細胞療法と遺伝子治療の研究を行い、2019年、北海道大学小児科学教室の教授に就任し小児の白血病と骨髄不全の研究と診療で日本をリードしてきた。小児がん診療は、多施設共同臨床研究により長足の進歩を遂げており、例えば最も患者の多い急性リンパ性白血病の生存率は、1980年代50％台であったものが現在は90％に達している。真部教授は、国内の全ての研究グループを統合して日本小児がん研究グループ（JCCG、2014年設立）を立ち上げ、2023年にその理事長に就任した。これは白血病にとどまらず、脳腫瘍や神経芽腫など多様な小児がん全てを対象にしたもので、中央診断（病理、遺伝、画像）とデータセンターを擁し、AMED等の研究費を得て毎年全国から2,000人の患者が登録されている。また、様々な厚生労働省の班会議に参加し、難病では先天性赤血球形成異常性貧血（CDA）とサラセミアを担当し、小児白血病の標準治療の確立と小児がんの患者と家族の支援を考える班で代表を務めた。北海道大学赴任後は、小児がん拠点病院である北海道大学病院をベースに、大学や病院の垣根を越えた多職種連携体制を構築し、道内の小児がんの診療と研究、そして専門教育の発展に寄与している。

脊髄損傷患者に対する新しい再生医療の開発と実用化

札幌医科大学医学部附属研究所再生医学研究所神経再生医療学部門

教授 本望（ほんもう） 修（おさむ）

本望修先生は、平成元年に札幌医科大学医学部を卒業し、脳神経外科に入局後、平成３年から、米国のニューヨーク大学・脳神経外科へ留学し、平成４年からは米国エール大学・神経再生研究所で神経科学や神経再生の研究に従事した。平成７年に帰国後、札幌医科大学脳神経外科助手、その後講師に就任し、脳神経外科の臨床、研究、教育に従事してきた。平成23年、札幌医科大学・医学部附属フロンティア医学研究所神経再生医療学部門・教授に就任し、医学部附属病院神経再生医療科・教授も兼任した。令和６年、札幌医科大学医学部附属研究所・所長を務め、令和７年からは、札幌医科大学・副学長に就任し、また同時に札幌医科大学附属研究連携推進機構・機構長として大学全体の研究推進に努めている。

本望修先生は、世界で初めて、脊髄損傷に有効な治療薬（自己骨髄間葉系幹細胞製剤）を開発した。厚生労働省の認可が得られたこの治療薬は、2019年５月から実際の臨床で保険診療として使用されている。現在は、札幌医科大学附属病院をはじめ、全国の病院で、再生医療が実施されている。「神経は一度障害を受けるとその機能は元に戻らない」という生命科学でいうセントラルドグマに対して、長年にわたって挑戦し続け、脊髄損傷以外の難治性神経疾患、すなわち脳梗塞、認知症、ALS等にも適応拡大できることをつきとめ、既に、札幌医科大学附属病院で臨床試験が実施されている。このように、新しい再生治療を北海道で開発し、世界の再生医療の発展へと大きく貢献している。

画像診断を用いた循環器疾患の心事故予測に関する研究と医療安全推進のための活動

札幌医科大学医学部医学科医療安全・病院管理学講座

教授 橋本暁佳（はしもとあきよし）

橋本暁佳教授は、1989年に札幌医科大学医学部を卒業後、同旧内科学第二講座（現内科学講座循環病態内科学分野）に入局し、循環器疾患に関する診療・研究・教育に従事してきた。心臓核医学検査などの画像診断を用いて、将来の心機能改善推定あるいは心事故発生予測に関する臨床研究に携わり、併せて医療安全上の有用性を検証してきた。心筋脂肪酸代謝イメージング、心筋交感神経イメージング等、いわゆる心筋代謝機能評価画像を用いることにより、心筋梗塞後の心機能改善、慢性心不全の心事故発生が予測できることを報告した。負荷心筋血流イメージングでは、負荷中の運動誘発虚血発作が医療安全上のリスクであったが、軽度の運動中に血管拡張薬負荷を併用することで、診断精度向上と副作用低減が得られることを見出した。肺高血圧症診療・研究にも主導的に携わり、カテーテル検査によってのみ測定可能であった肺血管抵抗を、心臓超音波検査によって非侵襲的に推定し、肺血管抵抗推定指標により肺高血圧症の心事故発生リスクを予測できることを報告した。2012年に札幌医科大学附属病院医療安全推進部副部長、2023年に札幌医科大学医学部医学科病院管理学講座教授に就任し、現在は医療安全管理責任者として、医療事故後対応、医療事故防止活動などの医療安全業務に従事している。院外での医療安全活動も活発に行い、道内医療機関での講演等の活動の他、医療事故調査委員会に外部委員として多数参加し、道内外の医療安全推進への貢献は著しい。

低酸素応答性転写因子群による生体機能調節機構の解明

旭川医科大学地域共生医育センター

センター長・教授 牧野雄一（まきのゆういち）

牧野雄一教授は、平成４年に旭川医科大学を卒業後、内科学第二講座（現内科学講座内分泌・代謝・膠原病内科学分野）に入局し、代謝・内分泌疾患、免疫疾患に関する診療・研究・教育に従事した。旭川医科大学大学院修了後、スウェーデン王立カロリンスカ研究所に留学し、細胞外環境による転写因子機能制御と疾患の関わりについて知見を広げた。特に低酸素応答性転写因子HIF-1αの制御機構に関する一連の先駆的研究では、低酸素状態における細胞応答の精緻なメカニズムを解明し、生体恒常性の維持の他、腫瘍、炎症性疾患、代謝性疾患など多様な病態におけるHIFの役割を常に臨床応用を見据えて体系的に示した。中でも、内因性HIF抑制分子であるIPAS/HIF-3αの発見は、生体の低酸素応答におけるネガティブフィードバック制御機構のモデルを世界で初めて提示し、低酸素応答研究分野の進展に多大な貢献を果たした。帰国後、東京大学医科学研究所助手、科学技術振興機構さきがけ研究員などを経て旭川医科大学内科学講座病態代謝内科学分野に帰局し、若手研究者の育成にも積極的に取り組んだ。令和２年、旭川医科大学地域共生医育センター教授に就任した後も、IPAS/HIF-3αの独創的研究の継続を通じて、次世代の医学・生物学研究の発展に大きく寄与している。

一方、旭川医科大学地域共生医育センター長として、「北海道の医療課題を解決するマルチタスク型地域医療医育成体制の構築」事業を推進し、旭川医科大学による地域医療貢献・地域医療教育の新展開にも貢献している。